

発達障害のある子が在籍する通常学級における協同学習に関する検討
— 自閉症スペクトラム児の特性を考慮した構造的支援とその効果 —
キーワード：協同学習 自閉症スペクトラム児 通常学級 構造的支援

特別支援教育学専攻
特別支援教育コーディネーターコース
M08118F 金子 由美

担任： 男性 教職経験5年
特別支援学級経験なし

(2) 手続き

【実施期間】 200X年 4月～7月

【内容】 体育「リレー」全6時間

【評価】 ビデオ観察、質問紙アンケート、聞き取り、

(3) ニーズの調整から授業づくり

アセスメントによって対象児、学級のニーズを把握し、対象児と学級の実態やニーズを調整して授業づくりを考えた

(4) 授業づくり（協同学習）

対象児が好きな活動である体育に協同学習を取り入れた。学習と社会性の目標を立て、担任と話し合いながら授業の内容や進め方を考えた。

(5) 支援について

- ・対象児の特性に配慮した支援として、興味関心が持て、見通しが持てる学習内容と対象児の既に獲得しているスキルが使用できる学習内容を考えた。
- ・協同学習による構造的支援として、グループメンバーの構成、話し合いスキルの提示、グループ目標設定、役割分担を取り入れた。

2. 結果

◇対象児と他児の相互交渉の質的变化

回を重ねるごとに、グループ内での対象児と他児とのかかわり方の質が変わり、対象児の学習意欲の高まりが見られた。また、他児の対象児への理解がなされ、受容の改善が見られた。

◇対象児と他児との相互交渉の量的変化

回を重ねるうちに、ネガティブな相互交渉は減り、ポジティブな相互交渉が増えた。他への協力や意欲などの対象児の社会性の向上が見られた。

3. 考察

対象児は友達関係にニーズがあった。体育の授業に構造化された支援を取り入れたことでグループ内での対象児と他児のポジティブな相互交渉が促進され、対象児の社会性や学習意欲、成果に高

I. 問題と目的

我が国には、LD、ADHD、高機能自閉症などの発達障害により学習や生活面で特別な教育的支援を必要としている子どもが6.3%の割合で通常学級に在籍している可能性が明らかにされている(文科省、2003)。これらの発達障害のある子どもたちは、通常学級において学習上の困難と共に友達関係など社会性の困難も抱えているといわれている。にもかかわらず、通常学級での発達障害のある子どもたちへの支援は十分になされていないのが現状である。

これらの子ども達の抱える困難さへの支援方法として、発達障害のある子もいない子も共に学び、社会性や学習意欲を高めることができるような支援プログラムが必要となってくる。協同学習(cooperative learning)は、諸外国では障害のある子ども・ない子どもの双方の学力向上や社会性の発達に効果的であることが指摘されている(吉利,2004; Meijer,2001)。我が国においても最近、協同学習は多くの学校で取り込まれるようになり成果が報告されてきているが、発達障害のある子どもも含む集団を対象にした協同学習に関する研究は未だない(涌井,2007)。

そこで本研究では、発達障害児が在籍する学級に協同学習を導入し、従来の協同学習の構造化された枠組みに発達障害のある子どもの特性に配慮した支援を取り入れた授業を行い、発達障害のある子どもの社会性や学習意欲・成果が高まるのか、(発達障害のある)仲間の受容の改善が見られるのかなどの教育的効果を検証していくことを目的とする。また、構造的支援の効果についても見ていく。

II. 事例研究① <体育>

1. 方法

(1) 対象

学校： A町立B小学校 児童約600人
対象児A：10歳男児 アスペルガー症候群
学級： 5年 約30人

まが見られた。また、対象児の受容の改善が見られるなど、構造的支援はある一定の効果があったと考える。

Ⅲ. 事例研究② <国語>

1. 方法

(1) 対象

学校： C 町立 D 小学校 児童約 600 人
 対象児 B：男児 アスペルガー症候群
 対象児 C：男児 アスペルガー症候群
 対象児 D：男児 アスペルガー症候群の疑い
 学級： 4 年 約 30 人
 担任： 女性 教職経験 16 年
 特別支援学級経験なし

(2) 手続き

【実施期間】 200X 年 4 月～7 月
 【内容】 国語「白いぼうし」全 7 時間
 【評価】 ビデオ観察， 質問紙アンケート，
 聞き取り

(3) ニーズの把握

アセスメントによって、対象児や学級の実態とニーズの把握を行い授業の目標を設定した。

(4) 授業づくり（協同学習）

国語の読み取りの授業に協同学習を導入した。特性から、対象児がこの話を読み取るには、困難が予想されたため、構造化された支援を行った。

(5) 支援について

協同学習における構造的支援と対象児の特性に配慮した構造化された支援を考えた。

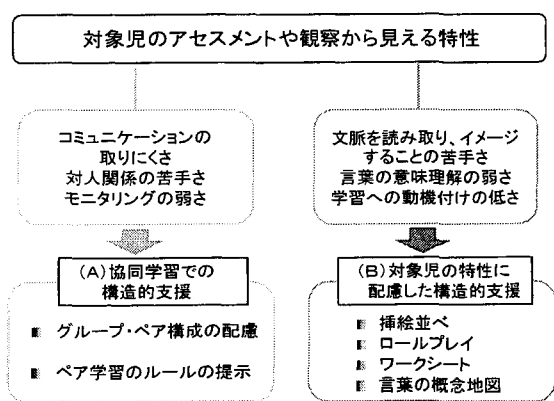


図1 対象児の特性からの2つの支援

2. 結果

◇ビデオ観察による対象児の学習の様子

ペア学習は、意味調べ、挿絵並べ、ワークシート、言葉の概念地図など、ほぼ毎時間行った。B児は、わかりやすく教えてもらうことで意欲と自信が、C児は、教えることで相手から感謝され自

己効力感が、そして、D児は意見の交流から、相手との連帯感が生まれた。ロールプレイは、3名ともはじめは、消極的な参加であったが他児から賞賛の言葉を得ることで、また、ロールプレイへの意欲を表していた。

◇ワークシートから見える対象児の学習の様子

対象児が作業したワークシートや言葉の概念地図から、物語の読み取りや人物の関係性の捉え方がわかった。B児は、二者間の気持ちの理解はできたが、関係性の捉えは話の場面ごとに限定され、物語全体の把握は難しいところが見られた。C児は、二次の誤信念課題の発問も通過し、登場人物の関係性も捉えていた。D児は、知的には高いが、一人読みでの気持ちの理解は難しかった。全体交流で友達の考えを聞いた後のまとめ読みでは、気持ちが読み取れていた。関係性は読み取り上、大事な登場人物が地図に書かれていないなど、理解の難しさがわかった。

3. 考察

対象児3名とも対人関係の苦手さを抱えていたので、スムーズなペア・グループ活動ができるように協同学習の構造的支援を取り入れた。予想以上に上手なかかわりができていたことからこの支援はおおむね効果があったと考える。また、対象児の特性に配慮した支援の効果は、対象児によって異なった結果となった。対象児によっては効果が出なかった支援もあるが、これらの支援はかかわりの場を提供し他児とのポジティブな相互交渉を促進したものと考えられる。

Ⅳ. 総合考察と課題

協同学習を取り入れたことにより、友達との相互交渉が促進され対象児の社会性や学習意欲の高まり、仲間の受容の改善が見られた。対象児に配慮した支援は、学級のニーズも満たすなど、効果が出た結果となったが、課題も明らかになった。協同学習の学習を進める際の留意点として、発達障害児も含め、児童の学力向上の視点からの授業づくりや支援方法を考え成果をはかっていくこと、一授業に終わらず継続的な取り組みの計画を立てること、協同学習の利点を生かせる教科・課題を設定すること、学級経営や集団作りからの協同学習の位置付けをおこなうことなどが挙げられる。

主任指導教員 宇野 宏幸